

1P57

小学校における感覚過敏への支援に関する調査研究

町田 唯香¹、橋本 創一²、日下 虎太郎³、
田口 禎子⁴、秋山 千枝子⁵

¹東京学芸大学大学院教育学研究科

²東京学芸大学

³東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科

⁴駒沢女子短期大学

⁵あきやま子どもクリニック

【目的】

感覚過敏が、自閉スペクトラム障害の診断基準に加わり、一層注目されている。そこで本研究は、実際にどのような感覚過敏への支援が小学校において行われているのか、行われる可能性があるのかを明らかにする。

【対象/方法】

感覚過敏のある児童を実際的に担当・把握し、理解・支援していると考えられる通級指導教室の教師を対象に質問紙調査を行った。研究協力者には研究主旨の説明と了承を得た上でデータを匿名化し個人情報に配慮した（東京学芸大学研究倫理委員会承認[152]）。具体的な事例を2つ（事例A、B）提示し、担任教師がどのような対応をすることが多いか、またどのような対応をすると考えられるかを自由記述で回答する形とした。事例は、A.聴覚過敏の児童に対する避難訓練場面、B.触覚過敏のある児童に対する通常授業場面、の2つとした。

【結果/考察】

回答者の教員経験年数は、5年未満の者が少なく、10～19年、30年以上が多い結果となったが、ばらつきはそれほど大きくない。それぞれの事例を、臨床心理学を専門とする大学院生2名と大学院教員1名により、KJ法で分析を行った。その結果、事例Aでは、①事前対応②他児の理解③参加中の情緒的な対応④避難訓練の説明⑤情報収集⑥刺激の減少⑦別室対応⑧その他の8つ、事例Bでは、①刺激からの回避②他児の理解③状況把握④授業構成の変更⑤慣れを促す⑥その他の6つが大カテゴリーとして抽出された。次に、それぞれの事例に関する対応の構造を明らかにするために数量化Ⅲ類を行った。その結果事例Aでは、解釈可能性を判断基準として2軸まで検討した。それぞれ軸の固有値は、第一軸が.926、第二軸が.878であった。第一軸を「刺激の調整」「刺激への挑戦」と第二軸を「事前対応」「避難中の対応」と命名した。事例Bは、解釈可能性を判断基準として2軸まで検討した。それぞれ軸の固有値は、第一軸が.879、第二軸が.824であった。第一軸を「個別対応」「集団への働きかけ」、第二軸を「刺激への挑戦」「刺激からの回避」と命名した。非日常的な場面と日常的な場面では対応に違いがあることが明らかになり、通常の授業時は、より他児の理解が必要になってくることが示唆された。また、スモールステップで刺激に挑戦させる、パニックにならないために刺激から回避するという2つの側面から刺激の調整がされていることが分かった。

1P58

集団の年齢構成と保育士が「気になる子」の特徴

落合 利佳

京都女子大学

【はじめに】

保育士がどのような子どもの様子を「気になる子」ととらえているのか、集団の年齢構成による特徴を明らかにすることを目的に調査を行ったので報告する。

【方法】

A市公立保育所で異年齢クラスを含む3～5歳児クラスの担任を対象に質問紙形式による調査を行った。調査期間は2019年8月～翌年2月。調査内容は担当クラスの気になる子とその内容（運動面、発達・行動面を含む21項目）。

【結果】

クラス毎の回答数は3歳児が12名、4歳児が15名、5歳児が11名、異年齢が8名。経験年数（全体平均10.6年）、担当児童数（全体平均20.0名）に有意差なし。クラスに占める気になる子の割合は3歳児（36.5%）、4歳児（38.1%）、5歳児（42.8%）、異年齢（37.3%）。保育士の8割以上が「気になる子の内容」として挙げた項目数は、4歳児が8項目、5歳児・異年齢クラスが7項目で3歳児クラスは3項目であり、4歳児で気になる項目数が急に増加していた。多動と「全体指示が聞けない」はすべての集団で高い割合を示した。5歳児では、不注意、不器用、姿勢保持や自己制御の困難に関する項目で高く、他児への暴力が一番低い割合を示した。4歳児では、粗大運動、姿勢保持の困難、発音不明瞭、言葉による援助要請の苦しさ、自分勝手な行動、不注意に関連した項目、3歳児は粗大運動で高い割合を示した。異年齢児は不注意・注意の転導に加え、自己制御の困難、拒否の意思表示の苦しさ、他児への暴力で高い割合を示した。

【考察】

5歳児では集中して話が聞けないなど小学校で求められる態度やスキルに関連した項目で目立つ子どもに保育士が気になりやすいことが示唆された。また、この年齢クラスでは自己制御ができない子どもが目立つ一方で、クラスの子も達がこのような子どもを避けるなどで、他児への暴力で気になる子どもの割合は低くなっている可能性も考えられた。3歳児クラスの保育士は主に運動発達や多動が気になると考えられた。一方で、運動や言葉を含む発達や行動面の課題が集団の中で目立ち出し、保育士が「気になる子」として認識し始めるのが4歳児の特徴と考えられた。異年齢児は、構成年齢の特徴から多様な人間関係からの摩擦が生じやすいため、社会性や行動面で課題のある子どもは目立ちやすいことが示唆された。

本研究は科研費（19K02632）の助成を受けたものである。